ワインの言葉に見る共感覚比喩

山 田 仁 子

Synesthetic Metaphors of Wine

Hitoko YAMADA

Abstract

Wine aficionados search for exact words to describe their impressions. They are often unsatisfied with ordinary language usage, and borrow words from glossaries of books about wine tasting, or even invent new expressions themselves. Their use of words simultaneously indicates the limit of established language usage and the creative power of language.

This paper examines synesthetic metaphors in wine tasting, especially those in which adjectives of 'hearing,' 'vision,' and 'dimension' modify the sensory experiences of 'smell' and 'taste.' These directions of modification do not seem to match with previous studies on synesthetic metaphors like Williams (1976) or Yamada (1992, 1993, 1994).

The data examined in this paper provide evidence that 'light' and 'dimension' hold the status of 'sensation' in the language of English, and show that some factors other than the sensory mechanism of synesthesia can help produce uncommon synesthetic metaphors.

序

味や匂いを直接に表す表現は本来数少ない。「栗の味がする」「さんまを焼く匂いがする」といった味や匂いに結びつく具体的な物による表現ならば、無数に可能だが、物の名前に頼らず味や匂いそのものを表そうとすると、とたんにその表現の数の少なさにとまどうこととなる。

ワインを愛する人たちはこうした語彙の枠に満足せず、ワインの味や香りについて、その複雑な味、微妙な香りの違いを描写するために様々な表現を駆使する。他の飲食物には用いられないような表現がワインの世界には生きている。言語の持つ流動的、創造的側面を探る鍵がここにある。

ワインから受ける味や香りの感覚経験を表そうとして直接に示す語彙がないとなると、間接的に表現する必要が生まれる。解決法としては大きく分けて二通りある。一つには同種の感覚をひき起こさせる別の物の名前を挙げて、聞く者に感覚を呼び起こさせる方法、もう一つには比喩による方法である。比喩は更に、一般的な比喩と共感覚比喩に分けられる。共感覚比喩とは、ある感覚経験を、本来異なる感覚経験を表す語彙で表現するものである。ワインについてはいずれの表現方法も、他の物に見られないような豊富さで利用される。

本稿ではワイン描写の表現の中から、特に聴覚や視覚、次元といった感覚経験を本来表す語が、ワインの香りや味といった嗅覚／味覚経験を表す共感覚比喩を材料に、共感覚比喩について考察する。これまでに Williams (1976) や山田 (1993) が提唱してきた共感覚比喩の体系を見直すことになる。なお、ワインは世界中で愛され、様々な言語で語られるが、本稿では英語による資料を主に使用する。[1)]

第一章：ワイン・テイスティングに見る共感覚比喩

ワイン・テイスティングは、儀式にも似て、概ね次にあげる順序で三つの要素が判断される。(ブロードベント，pp. 87-103)

1）ワイン・テイスティングに関する資料は膨大であり、そこで用いられる用語は、基本的な共通性はあるものの個人による差も大きい。ワインに使用可能な用語を全て扱うことは不可能であり、個人差を考慮することも難しい。本稿では言語使用の可能性を探るということで、稿末に記した出典に使用される語彙を全て取捨選択せずに資料とした。

1．外観（色、濃淡、透明度を含む）
2．香り
3．味

判断に当たっては、それぞれ、外観には視覚、香りには嗅覚、味には味覚と触覚といった感覚が関わる。味を判断する感覚として、味覚以外に触覚を挙げたのは、ワインを口に入れたときの舌触り、つまり触覚経験が味の判断に関わるからである。

ワイン・テイスティングでは、まず視覚によりワインの色などワインの外観を評価する。このための表現は数多いが、種類で言えば全てが二種類に分類できる。視覚経験に固有の表現と、視覚経験を基に想起される物の名前による表現である。'red' や 'white' など色を表す語や 'bright' や 'dark' といった明るさを表す語は、視覚経験をそのままに伝えるが、[2] 'golden' 'garnet' 'straw' といった語はワインの外観から想起される物の名前を介している。ワイン・テイスティングにおいては、物の名前が実に豊富に用いられる点が、他の飲食物の場合と比べ目立つ特徴である。

2）もっとも、Lehrer (1983, p. 12) が指摘するように、ワインについて用いられる場合の 'red' 'white' はトマトや牛乳のような色を意味するわけではない。Berlin & Kay (1969) の提示する、英語における 'red' 'white' の範囲の色より外に位置する。これは、色の分類が一言語内においても、固定したものでないことを示していると思われる。第一に、英語の基本的色彩語彙の数は Berlin & Kay によると11だが、状況により色全体が3種類や4種類に分けられることもあるのではないか。ワインについて 'red' か 'white' かと分類する時、英語の基本的色彩語彙である 'purple' 'brown' 'orange' や 'yellow' は、仮に実際のワインの色をより正確に表せるものであっても用いられない。この時色は、「黒」「白」「赤」という3色での単純な分類となっていると思われる。第二に、色味のあるなしあるいは色味の強弱を一つの色名が示す場合もある。日本語において「赤土」「赤味噌」「赤砂糖」「紅茶」などの語にはいずれも赤を意味する語が含まれるが、実際の色は、基本的色彩語彙の11色と照らし合わせると、赤よりもむしろ茶色に近い。この場合、「赤」という語は、「土」「味噌」「砂糖」「茶」といったそれぞれ同種類の物の範囲内で比較して、他の物より赤味が強いことを表している。「白味噌」の「白」も同様で、白味噌自体は黄色と言ってよい色だが、他の味噌よりは「白」に近いことを示している。「白」に近いということは色味の少ないことであり、極端な場合「白」という語は、色味の全くないことを表すことがある。「白蜜」の「白」は雪のような白を表すのではなく、「黒蜜」と対照的であること、つまり黒のような色味を全く持たないことを表す。「白」ワインも実際には透明であり、「白」という色彩語彙がここで示すのは、色味のないことである。

続いてワインの香りと味を評価する表現では、嗅覚経験や味覚経験に固有の語や類似する香りや味を持つ物の名前による表現に加えて、他の飲食物には見られない共感覚比喩表現が用いられる。共感覚比喩とは、ある感覚経験を本来その感覚に固有の表現で表さず、他の感覚に固有の語を借りて形容表現することを言う。たとえば「甘い声」においては、聴覚経験を味覚に固有の語で形容表現している。Williams を始めとする過去の研究は、共感覚比喩に一方向性が見られると論じている。Williams と山田 (1993) の提唱する共感覚比喩の体系を次に挙げる。

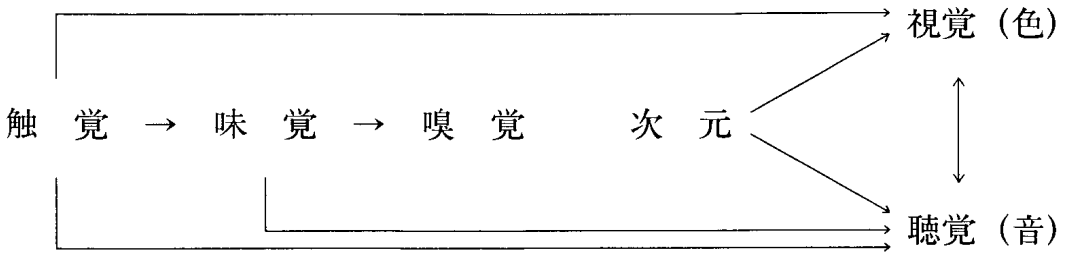

FIGURE 1. Williams の共感覚比喩の体系

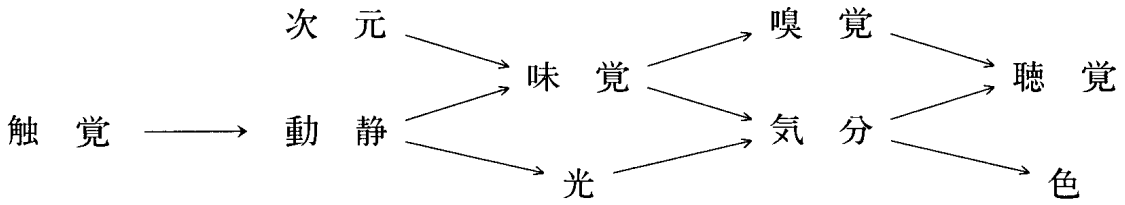

FIGURE 2. 山田 (1993) の共感覚比喩の体系

ところが、ワインの香りや味の表現にはこの一方向性に反すると思われる例が見られる。本来聴覚経験や視覚経験を表す語が、ワインの香りや味という嗅覚経験や味覚経験を形容表現するのである。次の(1)に挙げる語は本来聴覚経験を表し、(2)に挙げる語は本来視覚経験を表すが、共にワインについて語る時に、'wine' や 'flavour' 'taste' などの名詞を形容して、嗅覚や味覚の経験を表す。これは、上に見た共感覚比喩の方向に反している。Williams では聴覚、視覚が、嗅覚や味覚の語により形容されることはあっても、逆に形容することはない。聴覚については山田においても同様のことが言える。ただし、視覚について山田は「色」以外に「光」を設けているため、この視点から検討しなおす必要が

ある。

(1) dumb, eloquent, loquacious, with accent, harmonious
(2) bright, vivid, clean, dirty, beautiful, pretty, gorgeous

更に、次元からワインの嗅覚／味覚経験を表す例が多く見られる。これはWilliamsの体系には全く示されない組み合わせであるが、山田の体系には当てはまる。ワインについてのこうした多くの例は、次元感覚に関して山田の提唱する共感覚比喩の体系の正しさを裏づけている。

続く第二章では、(1)のような聴覚の表現が用いられるワインの共感覚比喩について、第三章では、(2)のような視覚の表現が用いられるワインの共感覚比喩について考察し、第四章では、次元の表現が用いられるワインの共感覚比喩について考察する。

第二章： 聴覚から嗅覚／味覚への共感覚比喩

本来聴覚経験を表しながらワイン描写にも用いられる語は、前章最後に(1)として列挙したが、これは語の本来の意味から次の二種類に分類される。人間の声の有る無し、あるいは音声の量や強弱を表すもの (1-a) と、音声全体の印象を表すもの (1-b) である。

(1-a) dumb, eloquent, loquacious, with accent
(1-b) harmonius

(1-a) の表現がワインの与える感覚経験について描写する場合、伝えるのは感覚経験の質や種類というより、むしろその刺激の量や強さである。'a high voice' や 'warm colors' といった共感覚比喩が、聴覚経験や視覚経験の種類をある程度特定し、何らかの音声や色を思い起こさせるのに対して、(1-a) の表現は特定の香りを思い起こさせはしない。どのような香りであるのか、(1-a) の形容だけでは想像することができない。ワインについての書物には大抵巻末に用語事典がついているものだが、'dumb' 'eloquent' については次のような説明が見られる。尚、各例においては、感覚を示す語等、論ずる上で重要な箇所に下線を施している。

(3) Dumb: Another word for CLOSED usually referring to bouquet ... little now, greatness to come. (Schuster, p. 134, glossary)

(4) Eloquent wine: wine rich in aromas and haptic sensations which it transmits with uncommon generosity and intensity; a wine with savours and flavours which express themselves in a distinct manner. (6カ国語辞典)

(3)の 'little'、(4)の 'rich in' 'with uncommon generosity and intensity' は、'dumb' 'eloquent' といった表現がワインの与える嗅覚的、触覚的刺激の量と強さについて述べていることを明らかにしている。なお、(1-a)の他の語、'loquacious' と 'with accent' について書き加えておく。'loquacious' は 'eloquent' と同意の語で、同様に刺激の量の多さ、豊富さを表す。'with accent' は刺激の量の多少を表すわけではないが、刺激の存在を表し、広い意味では感覚経験の量的存在を示すと言える。感覚経験の質を表すものではない。次の例のように 'French' という形容を伴う場合も、感覚経験の質を直接に描写してはいない。

(5) Dominus, Napa Wine with a French Accent, Opens Doors on Unique Winery (*Wine Spectator*, May 28)

(1-a) の本来の聴覚表現としての用法と、(3)〜(5)に見たワインに用いられる比喩的な用法では、意味論的に共通する点が存在する。(1-a) の表現は、本来の用法として聴覚経験を表す場合も、音声の質や種類を表すものではなく量的存在を表す。つまり、量的存在を表すという点では、本来の聴覚経験を表す用法でも比喩的に嗅覚経験を表す場合でも変わりはない。(1-a) を用いたワイン描写の比喩においては、量的存在を表す表現が、音声／聴覚経験の領域から香り／嗅覚経験の領域へと移項されていると言うことができる。

更に人間の領域からワインの領域へという移項も同時に起きている。(1-a) の表現は本来、音声といっても特に人間の声について用いられる。これがワイン描写に用いられる場合には、音声の出所であった人間が、香りの出所であるワインに置き換わっている。

また、音声と香り、人間とワインの対応に加え、音声が人間から出るのに対して、香りがワインから漂い出るという関係も対応している。「AがBの中から外に出る」というイメージが共通して存在するのである。Lakoff(1980, p. 29)

が日常言語の中で頻繁に使われる比喩として論じている「容器のメタファー」がここに見られる。まず人間については、Lakoff が「容器のメタファー」の項の冒頭に挙げているように、「容器」に見立てられやすいものである。Lakoff は我々人間について、次のように述べている。

(6) We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation. (Lakoff, p. 29)

人間は「容器」として、人間の声はその「容器」の中から出る物として捉えられる。ワインの場合、ワインは本来液体でありそれ自体では形を持たないが、やはり香りなどを中に含み入れる容器と見立てられる。(3)にはこのイメージが明らかに示されている。ここでもう一度(7)として次に挙げ、「AがBの中から外に出る」というイメージの存在を示す箇所に改めて下線を施した。

(7) (=(3)) Dumb: Another word for <u>CLOSED</u> usually referring to bouquet ... little now, greatness <u>to come</u>.

(7)の 'dumb' の定義の中にある 'CLOSED' は「閉じ込められた」という意味であり、容器に見立てられたワインの中に香りが入ったイメージを示している。ワインという容器の中の香りはやがて外に現れ出る。この変化を 'to come' が表している。「AがBの中から外に出る」というイメージがここには明らかに存在する。

ワインから出る香りは人間から出る声に喩えられることが、以上の考察から明らかであるが、ワインの比喩には更なる要素が組み込まれる。声は更に声が伝える人間の考えや感情にまで結びつき、ワインの香りはワインの香りが人に与える印象と結びつく。先に見た(4)の中にこの更に複雑なイメージが見られる。ここで再び(8)として挙げ、このイメージを特に示す部分に下線を施す。

(8) (=(4)) Eloquent wine: wine rich in aromas and haptic sensations which it <u>transmits</u> with uncommon generosity and intensity; a wine with savours and flavours which <u>express themselves</u> in a distinct manner.

'transmits' や 'express themselves' という表現は、本来人間の考えや感情について、これがある一人の人物から他の人物へ伝わることを表すが、(8)においてはワインの香り（'aromas' 'savours' 'flavours'）や口当たり（'haptic sensations'）が、ワインを飲む人に印象を与えることを表して用いられている。ワインとワインから出る香り(時に口当たりなども含む)、そしてワインのワインを飲む人に与える印象という三つの要素が、人間と人間の声、そして人間の考えや感情という三つの物に喩えられているのである。

以上の考察から、(1-a) の表現がワインについて用いられる場合、そこに複数の要素を持つ比喩の構造が存在することが明らかである。ワイン、ワインが飲む人に与える感覚経験、ワインのワインを飲む人に与える印象という三つの要素を持つワインの領域が存在し、この領域が、人間、人間の声、人間の考えや感情という三つの要素を持つ人間の領域に投影されている。そしてこの二つの領域を結ぶものとして一つの単純なイメージが介在すると考えられる。それは、容器の中からある物が外に出て、この物が更にもう一つの物に等しいというイメージである。ワインと人間はこの単純なイメージを共有するが故に、結びつけられる。[3] 図にすると次のようになる。

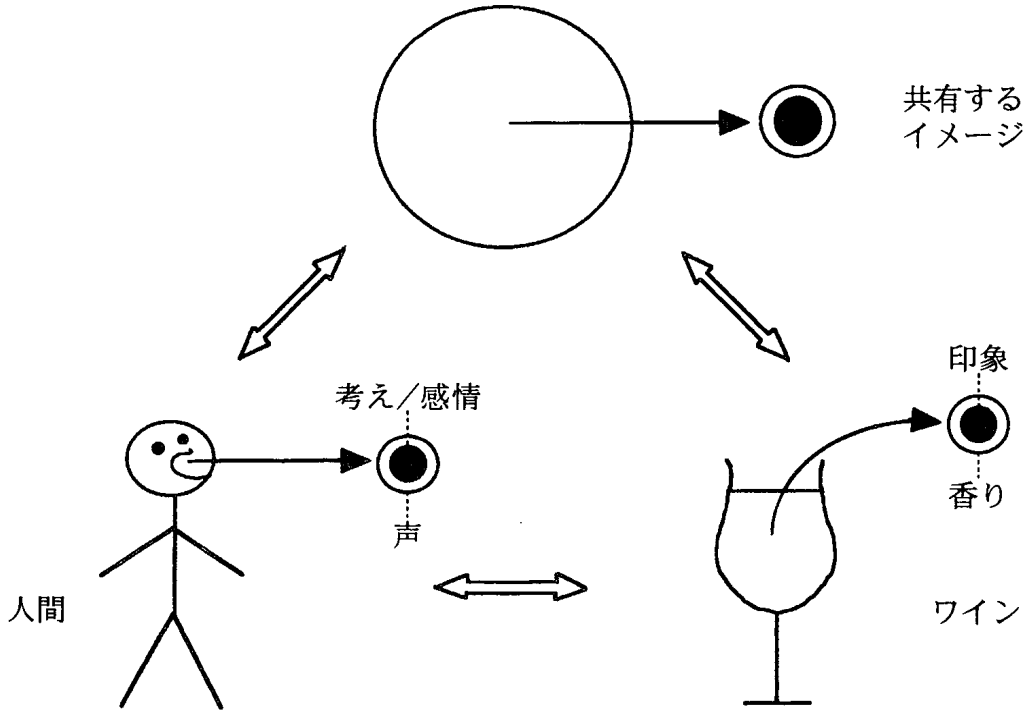

FIGURE 3.

3）二つの構造が互いに投影されるのは、二つの構造に共通する抽象的なスキーマの存在によると Fauconnier (1997, p. 103) が論じている。

(1-a) の表現を用いたワインの共感覚比喩においては、聴覚と嗅覚、つまり音声と香りの対応が、音声を放つ人間と香りを放つワインというより大きな二つの領域の構造的な対応の中に組み込まれており、この二つの領域の対応を成立させているのは、「AがBから外に出る」という抽象的イメージの介在なのである。

(1-a) の聴覚表現は、比喩においては嗅覚経験に用いられやすい。先の例(3),(4)(=(7),(8))で見た 'dumb' 'eloquent' も、'bouquet' 'aromas' 'savours' 'flavours' など主に嗅覚に関わるものとして定義されていた。もっとも 'savours' 'flavours' は味覚も表し、嗅覚だけに限られるものではない。また 'eloquent' については一部 'haptic' と触覚への言及がある。'accent' の場合は嗅覚とは特定できない。しかし、これらの表現により描写されるワインについての感覚経験はやはり嗅覚経験である場合が多い。次の例においても 'dumb' は嗅覚経験について用いられている。

(9) The odours in this state, whether finer or coarser, are generally more pronounced, often more penetrating. But they may also be less well defined, and in many cases the nose becomes "dumber", usually in a young wine. (Schuster, p. 16)[4]

(9)は 'odours' についての文章であり、'dumber' になるのは 'nose' 「香り」[5] である。

聴覚表現が比喩において嗅覚経験に用いられやすいという事実は、先に論じた「AがBから外に出る」というイメージの存在により説明される。ワインに触れずに感じることができる、つまり「ワインより外」で得られる感覚経験は味覚でも触覚でもなく嗅覚経験である。聴覚経験と同様に「AがBから外に出る」というイメージに適合するのは嗅覚経験ということになる。

次に、(1-b) に挙げた 'harmonious' について考察する。この語が実際にワインについて用いられる例を次に(10)として挙げる。

4) 本例中の 'pronounced' も音声に関わる意味を表し得る表現ではあるが、音声以外の名詞についても「際立った、著しい」といった音声に関わらない意味用法で用いられる。この例においても音声的意味あいは必ずしも感じられないと思われるので、本稿では考察の対象から外している。

5) ワインやお茶、たばこなどの香りは 'nose' とも呼ばれる。換喩による用法。ワインなどの香りを念入りに楽しみ判断する場合には鼻を特に働かせるため、鼻の存在が目立ち、こうした換喩を起こさせるものと考えられる。

(10) ... the wine is *balanced but not yet harmonious*. That is, you may be able to perceive the acid, alcohol, tannin and fruit as "separate" on the palate, but you feel the equilibrium is appropriate.

(Schuster, p. 28)

(10)の中程にある 'on the palate' とは 'in the mouth' のことであり (Schuster, glossary)、'harmonious' が味覚経験を表していることを示している。ワインの味の構成素のバランスが取れていることは 'harmonious' であることの最低条件で、更に味の構成素がばらばらに感じられてもいけないことをこの文章は示している。'harmonious' という語は本来、音全体の印象を表すが、ワインの香りや味について比喩的に用いられる場合も、それぞれの感覚経験について、やはり全体的な印象を表す。複数の音が重なり合って一つのまとまった美しい音楽となるように、ワインの香りや味についても、香りや味の様々な構成素がバランスよく釣合い、まとまりのある美味なるものとなっていることを表すのである。

'harmonious'、あるいはこれに類する語は、嗅覚や味覚だけでなく、視覚経験においても、また一般的なできごとについても、比喩的に用いられる。次の例(11)では色という視覚経験について聴覚表現の 'harmony' が用いられる。しかし、ここでも色という構成素の組み合わせについて述べる点は前例と同様である。また(12)では建築家と庭の設計者の仕事がうまく組み合わされたことと、その結果、庭の構成素である建築物と庭のデザインが素晴らしく組み合わされ一つの統一感を持った美を作り出しているということが、'in harmony' により表現されている。構成素がバランスよく釣合いまとまりがあることを表す点では、(10)のワインの味覚について用いられた場合と同じである。

(11) the harmony of color

(12) This is a very happy example of an architect and a garden designer working together in harmony. (English Garden BBC)

(10)のように、聴覚の表現で味覚経験を表すというのは、共感覚比喩表現としては極めて稀であるが、この場合も (1-a) と同様、共感覚以外の要素が働いている。'harmonious' という語彙の持つ「構成素のバランスが取れている」という意味が、聴覚の領域から味覚の領域へと投影されて、比喩表現を助けている感覚間の結びつき以外の、語彙的意味による結びつきが、強く働いている。

以上、ワイン・テイスティングの表現を材料に、聴覚から他の感覚への共感覚比喩を探った。聴覚から嗅覚や味覚へという方向の、ワイン以外ではあまり見られない例が存在するものの、共感覚以外の要素がこうした表現を助けていることが明らかとなった。(1-a) の場合、聴覚と嗅覚、つまり音声と香りの対応は、音声を放つ人間と香りを放つワインという大きな二つの領域の構造的な対応の中に組み込まれている。一般にはあまり見られない共感覚比喩を、「AがBから外に出る」という抽象的イメージを介した複合的な比喩構造が助けている。また (1-b) では、語彙の意味論的な共通性が、聴覚から味覚という共感覚比喩表現を助けている。

ただし、聴覚から他の感覚の方向へという共感覚自体が、(1-a) (1-b) を用いた共感覚比喩表現に含まれていないとは言えない。日本語の例になるが、日本語の聴覚経験を表す動詞「きく」は、「香（こう）をきく」「聞き酒」というように、香りを嗅ぎ味わうことを表す。また、多分に修辞的響きを持つが、次のようなワインの描写も見られる。

(13) 陽気でうちとけやすく、よく歌うブルゴーニュの赤 （伊藤，p. 72）

(14) ラインガウのワインは重厚さとエレガンスが同居する。バジリカで奏される祝典音楽に似て、荘厳さのなかを抜け渡る華麗な響きがある。
（同上，p. 76）

また上の二例の出典の書名は『ワインを聴く』であり、ここにも聴覚の表現が用いられている。聴覚から嗅覚や味覚への共感覚比喩表現は、語彙の意味的つながりだけによるものではなく、やはり共感覚という感覚そのものによっても生み出されていると思われる。

第三章： 視覚から嗅覚／味覚への共感覚比喩

次に、本来視覚経験を表す語が、ワインの香りや味といった嗅覚経験や味覚経験を形容表現する共感覚比喩表現について考察する。視覚経験に固有の語でありながら、ワインの香りや味を表す語彙を次に挙げるが、本来の用法における視覚経験の種類に従い、(2-a)～(2-c)の三種類に分類して提示することとする。明るさを表すもの (2-a) と、清潔さを表すもの (2-b)、そして主観的な印象を示すもの (2-c) である。

(2-a) bright, vivid
(2-b) clean (nose, smells, tastes or textures), dirty
(2-c) beautiful, pretty, gorgeous

比喩によらずに視覚経験を表す表現の多くは色彩語彙だが、色彩語彙が香りや味を形容する例はワインの場合にも見られない。唯一 'green' という語はワインと結びつけられるが、ここには、共感覚というより換喩と一般的な比喩が働いている。green という色は未熟な植物の際立つ特徴であるため、'green' という語は換喩的に未熟な植物を表す。ワインの味や香りの変化が、植物の成長に照らし合わされる比喩の構造の中で、未熟な植物はワインのまだ熟成していない状態に対応する。

色彩語彙で味覚や嗅覚の感覚経験を表すことが困難である一方、(2)の語彙は多少修辞的に感じられても、味覚や嗅覚の感覚経験を表すことが可能である。同じ「目」と言う感覚器官により得られる感覚ではあっても、色を見る感覚と色以外の物を見る感覚は区別する必要があることをこの事実は示している。色を見る感覚経験は、他の感覚の語彙により形容されることはあっても、色を表す語彙が他の感覚経験を形容することはほとんどない。「色」感覚は FIGURE 1. FIGURE 2.の共感覚比喩の体系における「視覚（色)」の位置で問題ない。しかし色以外の視覚の語彙は味覚経験や嗅覚経験を形容するところに位置しなければならないのである。

山田は視覚を「色」の感覚と「光（明るさ)」の感覚に分けたが、(2-a) はこの「光」感覚の表現に当たる。ただし、山田は「光」感覚の語彙が「気分」「聴覚」「色」といった感覚経験を形容するとはしたが、光感覚と味覚、嗅覚の関係は示していない。(2-a) の「光」感覚の表現はワイン描写において次のようにワインの味覚、嗅覚経験を表す。'vivid' と 'bright' とが 'California white' というワインと 'flavors' をそれぞれ形容している。

(15) Check out the price on this vivid and refreshing California white, filled with bright grapefruit and lemon-lime flavors.
(*Wine Spectator*, April 22)

上のことから、光感覚から味覚と嗅覚への共感覚を共感覚比喩の体系に加える必要があるかもしれない。ただし、現在分かっている例はここに挙げたワインについての二語のみだけであり、'warm color' などの触覚から色感覚、'low

voice' などの次元から聴覚といった共感覚のような強い結びつきは見られない。光感覚から味覚、嗅覚への共感覚については今後更に研究する必要があると思われる。

(2-b) の清潔さを表す語はここで視覚経験を表す語として挙げたが、視覚経験に限らず、状況といったものを、これらの語は説明している。'clean' は汚れや混じりけのないこと、'dirty' はその逆に汚れているという状況を表す。ワインについて用いられる場合も次の(16)(17)に見るように 'clean' は不快なものや欠点がないことを表し、(18)に見るように 'dirty' は欠点があることを表す。

(16) Every wine's nose should be clean; that is free from any unpleasant stink, mouldiness, acridity etc. (Schuster, p. 18)

(17) A wine without faults is called *clean*. The majority of faults are chemical or biological in origin and cause unpleasant smells, tastes or textures. (同上, p. 28)

(18) A wine with faults is called *dirty* or *out of condition*. (同上, p. 28)

だが、感覚的な要素が上に見た共感覚比喩表現の成立を部分的であるにせよ支えていることも否定はできない。'clean' は次の例に見るようにワイン以外にも用いられるが、混じりけのないことを特に主張するというよりも、さわやかな感覚を伝えている。

(19) the clean scent of pine (*Webster*)

また、'clean' と同様に不快な混じりけのないことを表す意味を持つ 'clear' は、次のように視覚経験や聴覚経験を形容するが、この場合にも混じりけがないという事実の描写以外に、話者が受けた感覚的な印象を伝えている。

(20) a clear red

(21) a clear sound

次の(22)と(23)においても 'clear' は視覚経験と聴覚経験を形容しているが、ここで表現されているのは混じりけのなさよりも明るさに似た感覚的な印象である。(23)は音声学の専門用語で二種の ［ l ］ 音の違いを表すがここで 'clear'は

'dark' の反意語として、つまり光の感覚を表す語として用いられている。

(22) a clear light
(23) clear [1] / dark [1]

(20)〜(23)に見た 'clear' の用法は、混じりけのなさと明るさが密接な関係にあることを示している。混じりけのない物には「明るい感じ」が伴いやすい。色は混ぜれば「暗く」なるといった経験が基盤となって、光の感覚を思い起こさせるのかもしれない。更に、清潔さと明るさも密接な関係にある。清潔な物は本来の色の明るさを保つが、汚れれば色の明るさを失う。ワインについて用いられる 'clean' 'dirty' も、欠点のあるなしに加え、清潔感と明るさ／暗さを伝えている。

以上の考察より、'clean' 'dirty' がワインについて用いられる場合、ワインの状況説明に加え、光感覚から味覚、嗅覚、触覚へという方向での共感覚が働いていると考えられる。共感覚としては、(2-a) と同類ということになる。

次に (2-c) の主観的印象を表す語について考察する。これらの語は以下のようにワインについての味覚、嗅覚経験に対して用いられる。

(24) it's very pretty with its peachy-apple character.
(*Wine Spectator*, April 16)
(25) they did show some pretty fruit and tannins.
(*Wine Spectator*, May 28)

こうした例は Williams の共感覚の体系には合わず、山田の光感覚でも説明できない。

(2-c) の語は本来視覚経験を表す語だが、色彩語彙などとは異なり、視覚経験の種類を特定するものではない。「目で見て心地よい」という話者による主観的な判断を表すだけである。感覚経験をそのまま伝え思い起こさせると言うよりも、むしろ、感覚経験を踏まえた上での判断を表している。感覚経験の種類を特定しない語というのは (2-c) に限らず、共感覚比喩の方向に関して、感覚経験の種類を特定する語とは異なる振る舞いをすると考えられる。

感覚経験の種類を特定する語とは、例えば触覚経験の種類を表す「柔らかい」や味覚経験を表す「甘い」といった語のことである。Williams や山田の共感覚比喩の研究は主にこの種の語彙についてのもので、こうした語について感覚間

の比喩の方向が一方向であることを明らかにしている。感覚経験の種類を特定はしないで感覚経験を表す語には、(2-c)や先に触れた‘eloquent’などが含まれる。本来視覚の経験を表す（2-c）も本来聴覚の経験を表す‘eloquent’も、感覚経験の種類を特定する語について見られた共感覚比喩の一方向性に逆行して、嗅覚や味覚の感覚経験を比喩的に表す。

また、これまで主に形容詞を考察の対象としてきたが、日本語の感覚経験を表す動詞についても、同様の現象が見られる。聴覚経験を表す動詞「きく」や視覚経験を表す動詞「みる」といった動詞は感覚経験の種類を特定するものではなく、やはり次の例に見るように、共感覚比喩の一方向性に逆行して、嗅覚や味覚の経験を表すことができる。

(26) 香（こう）をきく
(27) 味をみる

感覚経験の種類を特定しない語というのは、感覚経験以外の要素を伴いやすく、この感覚以外の要素が、一般には起きにくい共感覚比喩を助けていると考えられる。‘eloquent’の場合は、先に見たとおり、量的存在を示すという共通点が聴覚経験と嗅覚／味覚経験を結びつけ、比喩の成立を助けている。(2-c）の視覚表現や「きく」「みる」という動詞の場合は、個別の感覚経験を超えた、より高次の判断を示す要素が、比喩の成立を助けていると考えられる。(2-c）の英語の形容詞は、感覚経験や感覚を引き起こす物自体の善し悪しについて、話者の主観的判断を表す。また、「きく」「みる」という日本語の動詞は、本来は聴覚や視覚の行為を表すが、比喩として嗅覚や味覚に用いられる場合、感覚経験以外に「判断する」という知的経験を表す意味あいが加わる。一般の共感覚比喩のように、感覚経験だけについて述べてはいない。

(2-c）の視覚表現や「きく」「みる」という動詞が、嗅覚や味覚の感覚経験を表す共感覚比喩においては、聴覚／視覚から直接に嗅覚／味覚へという共感覚だけでなく、(28)のように、視覚から知的判断、そして嗅覚／味覚へという比喩を含む語彙用法の変化が起きていると考えられる。

(28) 聴覚／視覚 → 知的判断 → 嗅覚／味覚

(2-c）も「きく」「みる」も、上の変化の第一段階のみを経た、感覚経験以外の一般的事柄について判断を表す用法がある。次にその例を挙げる。

(29) pretty story
(30) 聞き分けのない子供
(31) 脈をみる

(29)は視覚などの感覚経験に直接には関係しない 'story' という事柄全体に対する印象を伝えている。(30)(31)は聴覚や視覚にわずかな関連は感じられるものの、あくまで中心は感覚外の知的レベルでの状況を伝えている。(30)は他人の希望を理解し受け入れることを、(31)は脈の正常さについて判断することを伝えている。

聴覚、視覚の感覚経験を本来表す動詞で、知的レベルの経験を表す比喩の例は英語にも見られる。次の例(32)で 'listen' が表すのは、音声を聞くということよりも親の言葉の意味内容を理解しその通りにするということであり、(33)で 'see' が表すのは実際に何かを目にするということではなく理解するということで、共に知的経験を表している。[6] どちらも(28)の第一段階のみを経た語彙の用法と言える。

(32) Listen to your parents.
(33) I see what you mean.

いったん個別の感覚を離れ、知的判断について表すようになると、判断をする対象の一つとして新たに感覚経験を取り上げることが可能になる。感覚経験について知的判断を下すのである。共感覚比喩による直接的な比喩が起きにくい感覚間でも、間接的に比喩表現が成り立つことになる。こうして直接的な共感覚としては起きにくい、(24)から(27)のような聴覚／視覚から嗅覚／味覚への共感覚比喩表現が成立しやすくなる。先に挙げた Williams や山田の共感覚比喩の体系の中では最も離れ逆行している視覚から触覚という比喩さえも、(34)のように許されることとなる。

(34) 湯加減をみる

以上の考察より、感覚経験の種類を特定しない語を用いた共感覚比喩表現においては、共感覚以外の要素が存在し、これが一般には起きにくい共感覚比喩

6) Sweetser (1990) は、英語を始めとする印欧語の知覚動詞について、歴史的な語彙の変化を調べ、物理的な視覚や聴覚を表す語彙が、心理的な理解の意味を持つようになった例を多く挙げている。(pp. 32-35)

表現を助けているということが明らかになった。ただし、こうした場合に共感覚自体が働いていないとは言えない。先にも論じた通り、(13)(14)の例は聴覚から嗅覚／味覚への共感覚の存在を示していた。

第四章： 次元から嗅覚／味覚経験への共感覚比喩

Williams は次元感覚からの共感覚については、FIGURE 1.にあるように視覚経験（色）や聴覚経験（音）を形容する方向での結びつきは示していた。だが、次元から嗅覚／味覚への共感覚比喩については示していない。これに対して山田は次元から嗅覚／味覚への共感覚比喩の存在を示している。ワインについての多くの例は、この種の共感覚の存在を強く裏づけるものである。ワインに用いられる主な次元感覚の語彙を次に挙げる。

(35) high, low, deep, small, big, huge, massive, gigantic, elephantine, thin, thick, flat, even, round, angular, curved, pointed, pricked

次元の表現は物の形を表す場合も多く、形を表す語はその形が引き起こす触覚経験の表現にもなる。こうした表現は一見すると、次元から触覚への共感覚比喩のようだが、感覚というより日常の経験から起きる結びつきに過ぎない。上に挙げた次元感覚の語彙も、ワインを口に含んだときの舌触りを表す場合もあるが、本稿では共感覚比喩とはみなさない。ただ舌触りという触覚経験と味自体を感じる味覚経験は、同時に同所の感覚器官で体験するものであり、感覚の種類を分けがたい場合も多い。次の例にある 'round' はタンニンという独特の舌触りを伴う味の成分について形容しており、触覚経験を表すものか味覚経験を表すものか、いずれとも明確に述べることはできない。

(36) their <u>round</u> and intense tannins (*Wine Spectator*, May 28)

だが、明らかに嗅覚／味覚についての形容と分かる例もある。次の例(37)において 'depth' は 'flavors' について用いられ、(38)において 'flat' は 'taste' という味覚の動詞と共に用いられている。

(37) its layers of ripe pear, fig, citrus and honeysuckle <u>flavors</u> gain <u>depth</u> and complexity thanks to judicious oak seasoning ...

(*Wine Spectator*, April 11)

(38) BOTTLE SICKNESS: A condition affecting wines immediately after bottling or shipment. The wine can taste flat or off, or smell of sulfur dioxide. (*Wine Spectator*, glossary)

また、次の定義において 'thin' は、嗅覚／味覚と色感覚すべてについて用いられている。

(39) THIN: A wine that is light-bodied, lacks flavor, and is generally light in color. (*Wine Spectator*, glossary)

次元から嗅覚／味覚への共感覚比喩を Williams は示さなかったが、上に見た例はこの種の共感覚比喩の存在を明確に示している。

結　び

以上、ワインの香りや味を表す共感覚比喩について、特に本来聴覚や視覚、次元という感覚経験に固有の語が、香りや味といった嗅覚／味覚経験を表す共感覚比喩について考察してきた。

共感覚比喩に一方向性が見られることは過去の研究から明らかにされており、聴覚／視覚から嗅覚／味覚という共感覚比喩の方向は、この一方向性に反する。しかし、過去に主張されてきた共感覚比喩の方向性が、本稿でみた例によって全て否定されることにはならない。本稿で扱った聴覚／視覚から嗅覚／味覚への共感覚比喩表現の多くで、共感覚以外の要素が比喩の成立を助けていた。また、視覚からの共感覚比喩の一部は、山田（1993）のように「光」感覚を設け、光感覚からの比喩として見直す可能性がある。光感覚から嗅覚／味覚へという共感覚比喩の方向は、山田が提唱する共感覚比喩においてその結びつきは示されてはいなかったが、逆行するものではない。ただ、本稿で扱った例はまだ数が少なく、この新たな感覚の結びつきについて明らかにするには、言語学的にも心理学的にも更なる研究が必要であろう。

また、次元感覚から嗅覚／味覚へという方向での共感覚は、Williams をはじめとする過去の研究において無視されてきたが、山田が示すように確かに存在することが明らかである。

ワインの描写においては共感覚を伴わない比喩表現も数多く使用され、比喩

一般についての興味深い資料を提供しているが、この問題については、改めて論ずることとしたい。

例文の出典

Gove, P.B. Ph.D. *et al*. (eds.) *Webster's Third New International Dictionary*. G. & C. Merriam Company.

Murray, J.A.H. *et al*. (eds.) *The Oxford English Dictionary*. Oxford University Press.

Schuster, M. 1989. *The Simon and Schuster Beginner's Guide to Understanding Wine*. Simon and Schuster Inc.

English Garden BBC (TV programme).

Wine Spectator magazine on internet, 1998.

伊藤真人. 1990. Art of Wine ワインを聴く テースティングの奥義を極める. 学習研究社.

フーロン, ドミニク(編). 1996. Moët-Hachette ワイン6カ国語辞典 (*Dictionnaire Moët-Hachette du Vin International*). 柴田書店

参考文献

Berlin, B & Paul Kay. 1969. *Basic Color Terms*. University of California Press.

Fauconnier, G. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge University Press.

Lakoff, G. & Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.

Lehrer, A. 1983. *Wine and Conversation*. Indiana University Press.

Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge University Press.

Williams, J.M. 1976. Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change. *Language*, 52, pp. 461-478.

ブロードベント, マイケル. 1996. 西岡信子訳. マイケル・ブロードベントのワインテースティング. 柴田書店.

山田仁子. 1992. More than Five - 共感覚が浮き彫りにする五感以外の感覚 -. 徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学） 3巻, pp. 75-83.

_____. 1993. — 言語は感覚の内視鏡 — 共感覚に基づいた形容表現の分析. *HYPERION* 40巻, pp. 29-40. 徳島大学英語英文学会.

_____. 1994. More than Five II - 共感覚が浮き彫りにする感覚（英語の場合） -. 徳島大学総合科学部紀要（外国語・外国文学） 1巻, pp. 113-134.